

資料

芦生研究林で再発見された絶滅寸前種マルバスミレ (スミレ科)

于佳欣¹・増田和俊¹・阪口翔太^{1*}Re-discovery of *Viola keiskei* Miq. from Ashiu Forest, a critically endangered violet species in Kyoto PrefectureJiaxin YU¹, Kazutoshi MASUDA¹ and Shota SAKAGUCHI^{1*}

要旨

マルバスミレ (スミレ科) は京都府レッドデータブックにおいて絶滅寸前種に指定されている希少植物である。芦生研究林では 1936 年に本種の標本が採取されたあと生育記録が途絶えていたが、2022 年 5 月に著者らによって上谷地域で小個体群が現存しているのが確認された。本稿では芦生研究林で再発見されたマルバスミレの生育状況について報告した。

キーワード：絶滅危惧植物、スミレ、マルバスミレ

Abstract

Viola keiskei Miq. is a critically endangered violet species in Kyoto Prefecture. In Ashiu Forest, one specimen of *V. keiskei* was collected in 1936, but there have been no distribution records since then. In May 2022, a small population of *V. keiskei* was found by the authors in Kamitani area of Ashiu Forest, which we report here.

Key words: Endangered plant, violet, *Viola keiskei* Miq.

2022 年 5 月 6 日、著者の阪口と増田が芦生研究林の上谷地域を踏査していたところ、由良川本流沿いの河原で白色の花を咲かせているスミレ属植物を発見した (図 1)。川に沿って 10m 内の区間に 20 株ほどの開花個体が点在しており、それぞれが 1-4 個の花を付けて目立っていた (図 1a, b)。この植物の根出葉は卵円形 (葉身長 2-4cm) で、葉の表面や縁には毛を生じていた。赤味がる花茎の先端には直径 1.5cm ほどの白色の花がつき、その花卉の特徴として (1) 唇弁に紫色の筋が入る、(2) 花卉基部の内側は黄緑色を帯びる、(3) 側弁基部の内側にわずかに毛が生える、(4) 距は後方に伸びて淡紅紫色を帯びるといった性質が観察された (図 1c, d)。また柱頭はカマキリ型であった。こうした形態的特徴からこの植物はマルバスミレ *Viola keiskei* Miq. (スミレ科) として同定された。このマルバスミレの証拠標本は京都大学総合博物館に収蔵した (KYO 00026896; 付録)。

マルバスミレは日本と朝鮮半島に分布する無茎性のスミレ属草本植物である。国内では北海道道南地方から屋

久島まで分布が知られ、主に太平洋側の内陸部に多く分布している (いがり, 2012; 門田, 2015)。近畿地方では全府県で分布記録があるものの稀で (スミレ愛好会, 2002)、京都府内でも産地は限定されている (村田, 2004)。

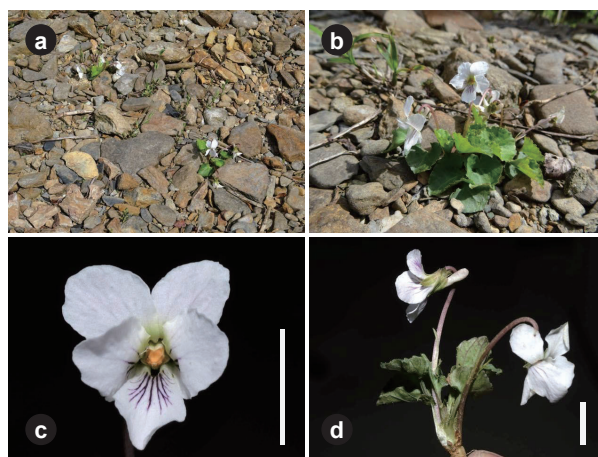


図 1. (a) 芦生研究林上谷の河原におけるマルバスミレの生育状況。(b) マルバスミレの全体像。(c) 花の正面写真。(d) 個体を横からとらえた写真。スケールバー：1cm。

¹ 京都大学大学院人間・環境学研究科

¹ Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University

* 責任著者：阪口翔太

〒 606-8501 京都市左京区吉田二本松町 京都大学大学院人間・環境学研究科

Tel : +81-75-753-6796, Fax : +81-75-753-6694

e-mail: sakaguchi.shota.6a@kyoto-u.ac.jp

著者が京都大学総合博物館で標本調査を行ったところでも、京都府内で採取されたマルバスミレの標本は5地点から採取された6点のみであった(付録)。さらに近年では生育環境の変化によるものなのか、マルバスミレは府内ではほとんど見かけられなくなっており、京都府レッドデータブック2015年版では絶滅寸前種に指定されている(京都府環境部自然環境保全課, 2015)。京都大学芦生研究林では1936年に岡本省吾博士によって1点のマルバスミレの標本が採取されている(Yasuda & Nagamasu, 1995; 付録)が、それ以降の標本記録はない。また2010年代より芦生研究林全域で植物調査を行ってきた市民研究者・福本繁氏の調査でもマルバスミレは見つかっておらず(福本繁, 私信), 研究林内での生育状況が不明となっていた。よって2022年5月時点において芦生研究林で知られるマルバスミレはこのたび再発見された1個体群のみとなる。

マルバスミレは半日陰から向陽地の斜面の崩壊地にみられることが多く、パイオニア的性質をもつ植物ではないかと考えられている(スミレ愛好会, 2002)。上谷で見つかったマルバスミレが生育していたのは2010年代に由良川の流れが変わって湿原との間に形成された河原であり、5cm程度の小石の隙間に土砂が堆積した平らな場所であった。一般的なマルバスミレの生育環境とは異なる部分もあるが、本種が好むような攪乱後に生じた不安定な環境であることから、付近から侵入したマルバスミレがこの河原に定着して繁殖できたものと思われる。マルバスミレが見つかった河原には現在のところ小型草本が疎らに生えるだけである。しかし今後、木本植物が侵入して光環境や土壌環境が変化していくとマルバスミレ個体群が衰退していく可能性がある。また河川氾濫による大きな攪乱を受けやすい場所でもある。絶滅寸前種に指定されているマルバスミレ個体群の保全を図るうえでは、現地種子の冷凍保存など生息域外での系統維持が確実な方法だと思われる。

謝辞

本研究を遂行するにあたり、京都大学フィールド科学教育研究センター芦生研究林には調査入林を許可して頂きました。京都大学総合博物館の利用にあたっては永益英敏博士に便宜を図って頂きました。福本繁氏には研究林内におけるマルバスミレの確認状況について情報を頂きました。記して御礼申し上げます。

付録

京都大学総合博物館に収蔵されている京都府産のマルバスミレ標本(2022年5月12日確認, 本調査で採取した標本を含めて全7点): Mt. Midake, Tamba Prov., 20 April 1930, *Takeuchi s.n.* (KYO!); Ashiu, Tamba Prov., 14 May 1936, *S. Okamoto s.n.* (KYO!); Wachi-cho, Funai-gun, 23 Sept. 1961, *G. Murata 15267* (KYO!); Wachi-cho, Funai-gun, 28 May 1978, *G. Murata, H. Koyama & T. Yahara 37120* (KYO!); Joyo-cho, 12 April 2007, *K. Kondo 07041206*; Nishigyo-ku, Kyoto City, 5 May 1992, *T. Yamazaki 1392* (KYO!); Kamitani, Ashiu, Nantan, 6 May 2022, *S. Sakaguchi & K. Masuda SS220506D* (KYO 00026896!).

引用文献

- 1) いがりまさし(2012)山溪ハンディ図鑑6増補改訂日本のスミレ. 287pp, 山と溪谷社, 東京.
- 2) 門田裕一(2015)スミレ科(改訂新版日本の野生植物3バラ科~センダン科)大橋広好他編. 311pp, 平凡社, 東京. 209-227.
- 3) 京都府環境部自然環境保全課(編)(2015)京都府レッドデータブック2015. 京都.
- 4) 村田源(2004)近畿地方植物誌. 257pp, 光栄堂印刷, 大阪.
- 5) スミレ愛好会(2002)増補改訂近畿地方のスミレ類—その分布と形態—. 63pp, ダイヤ印刷, 大阪.
- 6) Yasuda, S. and Nagamasu, H. (1995) Flora of Ashiu. Contr. Biol. Lab. Kyoto Univ. 28: 367-486.

(受理日: 2022年5月20日)